

『兵法家伝書』 伝本の比較研究 — 細川家本と小城鍋島家本 —

A Comparative Study of the Side Books of "Heiho - Kaden - Sho"

加藤純一

(Junichi KATO)

キーワード：『兵法家伝書』、細川家本、小城鍋島家本

key words : Heiho - Kaden - sho, The Hosokawa's manuscripts, The Ogi - Nabeshima's manuscripts

序

柳生宗矩によって著された『兵法家伝書』は、四系統の伝本（江戸家本、小城鍋島家本、鹿島鍋島家本、細川家本）が確認されている。^①

今日まで、『兵法家伝書』の思想的背景並びに形成過程については議論がなされてきたが、伝本間の構成比較はなされてこなかった。この背景には、四系統とも宗矩の花押があり、宗矩のごく近い門弟にのみ伝授された「家伝書」という性格からすると差異はない、あるいはあってはならない、といった見識がはたらいっていたものと推察できる。

ところで、近年、兵法伝書の整理が行われるなか、門外不出であるはずのこの『兵法家伝書』の流布本を目にする機会が増えた。例

えば、全日本剣道連盟総務・資料小委員会（東日本）がまとめた鈴鹿家文書^③には数点の流布本を確認することができる。これらの資料を精査する際に、どの系統の伝本を基としているのか、伝系ではなく内容的特長から判断する指針が明確になっていない事実に直面した。つまり、四系統の伝本の内容的差異が明確にならない限り、流布本の調査も立ち行かないというわけである。

今回の論考では、文書の活字化と既に活字化されている文書との比較より、その差異を明確にしようと試みた。活字化の対象となる文書は細川家本であり、これは『日本武道体系』に複製収録されたものを用いた。また、比較対象となる伝本は小城鍋島家本で、これは拙著『兵法家伝書に学ぶ^④』の資料編に掲載されているもので、両

書とも原本は横綴本の体裁をなしている。なお、本稿の字数の関係で、今回は『兵法家伝書』の上巻部分（「兵法家伝書上巻序」）のみを取り上げた。

一 細川家本について

寛永一四年（一六三七）、肥後熊本五万石城主の細川越中守忠利に伝授されたものである。宗矩から忠利に与えられた伝書には、『新陰流兵法書』（寛永三年）、『以白紙伝兵法心』（寛永一四年）がある。後者は、『兵法家伝書』に添えられた白紙印可状であり、宗矩の花押とともに沢庵の識語が載せられ、沢庵の花押が見られる。

細川と柳生の関係で言えば、前者の『新陰流兵法書』の末尾にある「兵法要具三種心」の呈書が興味深い。この呈書の内容は、『兵法家伝書』に反映されたと見られるものである。これは、宗矩から細川に与えられた伝書に添えられたものであるが、実は細川から宗矩宛の、同様のものが柳生家には存在する。⁽⁵⁾ 事実関係を整理すると、「細 越中」より「柳生但馬殿」に宛てられた「兵法要具三種心」⁽⁶⁾は、寛永三年に宗矩が執筆した『新陰流兵法書』に添えられてはいるが、宗矩が但馬守に就任したのが寛永六年であることに鑑みると、寛永六年以降にこの呈書が宗矩の所に届けられ、その内容が寛永九年の『兵法家伝書』に反映された、と看做されるのである。⁽⁷⁾

二 細川家本『兵法家伝書』上巻 凡例

1. 本書は『日本武道体系』に複製収録されたものを底本とした。

同書は、寛永一四年に柳生宗矩が細川忠利に伝授したものである。2. 本書での翻刻作業では、最初に本文を入力し、続いて朱書きの部分を加筆した。読点は文末箇所では句点に換え、不足箇所においては原文に従い加筆は行わなかった。

3. 朱書きの濁点は書き入れたが、本文にない場合にはそのままとした。

三 本文

兵法家傳書上巻序

柳生但馬守平

古^{イコシ}にいへる事あり^{ツハモノ} 兵者不^{シヤウ} 祥之^{ウツハモノナリ} 器^{ニクム} 天道惡^スレ之^エ。不^スレ獲^エレ止^ム 而^{ヤムコト}用^ユレ之^ヲ是^{モチユル}レ天道也^{ナリ}と此こと如何にとならば弓矢、太刀、長刀、是を兵と云是を不吉不祥の器也といへり。其故は、天道は、物をいかす道なるに、却^{カヘツテ}而^{シヤウ}ころす事をとるは、實に不祥^{マコト}の器也。しかれば、天道に、たがふ所を即にくむといへる也。しかあれと、不^スレ獲^エレ止^ムして兵を用て、人をころすを、又天道也と云。其心如何となれば、春の風に花さき緑そふといへ共、秋の霜来て、葉おち木しほむ是^{セイハイ}レ天道の成敗也物の十成する所を打こ^{シウシヤウ}とほり、あらは也。人も、運^{ウン}に乗じては、惡^{アク}をなすといへとも其惡十成する時は、是をうつ。こゝをもつて、兵を用るも、天道也といへり。一人の惡^{アク}に依^{ヨリ}て萬人苦む事ありしかるに、一人の惡をころして万人をいかす是等、誠に、人をころす刀は、人をいかすつるぎなるへきにや其兵を用るに法あり。法をしらざれば、人を

ころすとして、人にころさるゝならしツラクオモフ 熟思兵法といは、人と、我と、立あふて、刀二にて、つかふ兵法(マエ)、は負も一人、勝も一人のみ也。是はいとちいさき兵法也。勝負ともに其得失トクシツハツツカ 纒也。一人勝て、天下かち、一人負て天下まぐ。是大なる兵法也。一人とは、大将一人也。天下とはもろくの軍勢也。もろくの軍勢は、大将の手足也。もろくの勢をよくはたらかするは、大将の手、手足よくはたらかする也。諸の勢はたらかぬは、大将の手足はたらかぬなり。太刀二筋にて、立あふて、大機大用をなし、手足よくはたらかして、勝ことくに、諸勢をつかひ得て、よくはかりことをなして、合戦に勝を、大将の兵法と云へし。又両陣たかひに張て戦場に出て、勝負を決するは、云に不_レ及。大将たる人は、方寸の胸のうちに、両陣を張て、大軍をひきひて、合戦してみる。是心にある兵法也。治れる時乱をわすれざる、是兵法也。国の機を見て、みだれむ事をしり、いまだみたれざるに、治る是又兵法也。すでに治たる時は、遠き国々のはてくまでも、その国へはたれ、爰の国へはたれくと、受領国司を定め、国の守をかたふする、心の賦り、是又兵法也。受領国司代官地頭の、私ありて、下のなやみとなる事、尤亡国の端也。此機をよく見て彼受領国司代官、地頭の、私に、国を亡されぬ謀、是立相の兵法に、手字種利劍の、有無をみるがことしよく心をくたきてみるへきにあ。是兵法の大機なる物なり。又君の左右に、佞人ありて、上にむかふ時は、道ある風情をなし、下をみる時は、目をいからかす此人に、手をつかねさればよき事をあしきに申なし、罪なき

ものは、くるしみ、罪あるものは、却而ほこる。此機を見る事、手字種利劍よりも大切也。国は君の国也。民は君の民也。ちかき左右につかふまつるものも、君の臣也。とをくつかふる者も、同く君の臣也。親疎いくばくぞや。君の御為には、手のことく足のことし。足とをしとて、手にことならんや。痛痒をうくる事、ひとしければいづれを親しとし、いづれをうとしとせむや。しかるに、ちかき者、遠きをかすめ罪なきをくるしめは、くもりなき君をうらみたてまつらん。君にちかきものは、五人或十人にしてすくなし。とをき者は、多し。多きもの君をうらみて、心をはなすべしすくなくして近者ははじめよりわが身の為にして、君をおもひ奉らざるによりて、人の君をうらみ奉る様に、つかふまつるなれば、とある時は、をのれさきに、君に心をはなすべし。しからは、誰か君をおもひ奉らむ。只是左右の者のする所にして、君のとかにあらず。此機をよく見て、とをきも、めぐみの外ならぬ様に、あらまほし。是よく機をみるにあれば、即兵法也。又友に交りてはしめ終、たがはざるも、機をみてなす所なれば、兵法の心ならざるにあらず。一座の人の交りも、機をみる心、皆兵法也。機を見れば、あるまじき座に、永く居て故なきとがをかふ、り人の機を見すして、物を云、口論をしいだして、身をはたす事、皆機をみると、見さるとにか、れり。座敷に、諸道具をつらぬるも其所のよろしきさまに、つかふまつる事、是も其座の機をみる事、兵法の心なきにあらず。実に事はかはれとも、理は一の物なれば、天下の事に、あつるとも、たがふべからず。兵法

は、人をきるとはかりおもふは、ひがごと也。人をきるにはあらす、悪をころす也。一人の悪をころして、万人をいかす、はかりこと也。今此三卷クハンにしるすは、家イヘを出さる書也。しかあれと、道は秘ヒするにあらず。秘するは、しらせむか為也。しらせされは、書なきに同じ。子孫シソンよく思ラモヘ之コレヲ。

○大学ガクは初学シヨガクの門也と云事。凡家ヲヨソイヘに至るにはまづ門イクルより入もの也。然ば、門は家に至るしるべ也。此門をとをりて、家に入り、主人にあふ也。学は道にいたる門なり。此門をとをりて、道にいたる也。しかれば学は門なり、家にあらず。門を見て家なりとおもふ事なかれ。家は、門をとをり過て、おくにある物也。学は、門なれば、文書モンシヨをよみて、是か道なりとおもふ事なかれ。文書は道にいたる門也。さるによりて何程カクモン学問をし文字モンジ多しりても、道くらき人あり。書ムカイに向ては、よくよみ、古人コの注チウのことく、よみながせとも、道理ダウリにくらければ、道をわがものにする事ならざる也。しかるとて、学マナヒズひすして、道にいたる事も又かたし。学問ガクモンしてよく物をいふとて、道明アキラメたる人とも云かたし。学ヒトとすして、天然テンと道にかなふ人もある也。大学ガクに、致知チチ格物カクブツと云事あり。致チはつくすと云義也。知をつくすは、凡ソソ、世間セケンに、人のしると云程ホトの事、ありとあらゆることの理を、みなしりつくして、しらずと云事なきを、致ツクス知チヲと云也。又格物カクブツとは事をつくすとよめり。その事々の道理リを、しりつくせは、その事々ミナ皆しらずと云事なく、せずと云事なき也。しる事か、つくれば、事もつくる也。理をしらされは、何事も、ならざる物也。万ヨロツの事は、しらする故に、不審シシ

あり。うたかはしき故に、その事か、胸ムネをかさる也。道理があきらかにすめば、胸ムネに何もなくなる也。是を知をつくし物をつくすと云也胸に何もなく也たれば、よろつの事か、仕よく成者也。これ故に、よろつの道を学マナふは、胸にある物を、はらひつくさむ為也。はじめは、何もしらする故、一向カウに胸ムネに、不審フシシも、中々になき者也。学カクに入てより、胸に、物がありて、其物にさまたけられて、何事も仕シにく、なる也。其学マナびたる、事わが心をさりきれば、ならひも、何も、なくなりて、其道々のわざをするに、ならひにか、はらずして、わざは、やすらかになりて、ならひにもたがはず、われも其事をしなから、我もしらすして、ならひにかなふもの也。兵法の道是にて心得へし。百手モモテの太刀をならひつくし、身かまへ、目付、ありとあらゆる習を、能ヨクク々ならひつくして稽ケイ古コするは致ツクス知チヲの心也。さてよく習をつくせは、ならひの数々カスク、胸ムネになく成て、何心もなき所、格ツクス物コト之心也。様々の習をつくして、習稽古シユギヤウカウの修行功コウつもりぬれば、手足身に、所作シヨサはありて、心になくなり、習ナラヒをはなれて、習にたかはず、何事もするわざ自由也。此時は、わが心、いつくクライにありともしれす。天魔マゲダウ外道も、わが心をうか、ひ得さる也。此位クライにいたらん為の習也。ならひ得たれば又習はなく成也是か諸道シヨダウの、極意ゴクイ向上也。ならひをわすれ、心をすてきつて、一向に我もしらすして、かなふ所が、道の至極シゴク也。

○一 氣キと志シとの事

右、内にかまへて、おもひつめたる心を、志シと云也。内に志

ありて、外にはするを、氣と云也。たとへは志は、主人也。氣はめしつかふ者也。志内にありて、氣をつかふ也。氣かはつし過て、はしれは、つまつく也。氣を志に引とめさせて、はやまり過ぬ様に、すへき也。兵法にていは、下作によくかためたるを、志と云へし。はや立相て、きつつ、さられつするを、氣と云へし。下作に、とくととりしめて、氣を急々懸々に、すへからす。志をもつて、氣を引とめ、氣に志をひきずられぬ様にして、しつまる事簡要也。

○一 表裏は、兵法の根本也。表裏とは、畧也。偽を以て、真を得也。表裏とはおもひなからも、しかくればのらずしてかなはぬ者也。わか表裏をしかくれは、敵がのる也。のる者をは、のらせて勝へし。のらぬものをのらぬよと、見付る時は、又こちから、しかけあり。然は、敵ののらぬも、のつたに成なり。佛法にては方便と云也。真実に内にかくして、外にはかりことをなすも、終に、真実の道に、引入る時は、偽皆真実に成也。神祇には、神秘と云、秘して以て、人の信仰をおこす也。信する時は、利生あり。武家には、武略と云。畧は、偽なれ共、偽をもつて、人をやぶらずして、勝時は、偽終に真と成也。逆に取て、順に治と云是也。

○一 打草驚蛇と、禪に云事あり。草の中なる、くちなわを、うつて、おとろかす様に、人をも、一おとろかし、おとろかすか手立也。おもひもかけぬことをしかけて、敵をおとろかすも、表裏也、兵法也。おとろかされて、敵か心をとられて、手前

かぬくる也。扇をあげて見せ、手をあげてみするも、敵の心をとる也。我持たる、太刀を、ほかとなくなるも、兵法也。無刀を得たらは、太刀に事はかけまひ也。人の刀は、我刀也。機前のはたらしき也。

○一 機前と云は、何としたる事ぞなれば、敵の機の前と云心也。機と云は、胸にひかへ、たもちたる氣也。機とは氣也。敵の氣をよく見て、其氣の前にてあふ様に、はたらくを、機前と云也。禪機とて、専、禪に、此はたらきある事也。内にかくして、あらはさぬ氣を、機と云也。樞機とて、戸の内にある、くるろのたとへ也。内にかくして、あらはさざる難見機をよく見て、はたらくを、機前の兵法と、云也。

○懸待二字子細之事

一 懸とは、立あふやいなや、一念にかけて、きびしく切てか、り、先の太刀を、いれんとかゝるを、懸と云也。敵の心にありても、我心にても、懸の心持は、同事也。

○一 待とは、卒尔に、きつてかゝらすして、て敵のしかくる先を待を云也。きびしく、用心して居るを、待と心得へし。懸待は、かゝると、待との二也。

○一 身と、太刀とに、懸待の道理ある事

身をは、敵にちかくふりかけて、懸になし、太刀をは、待になして、身足手にて、敵の先を、おびき出して、敵に先をさせて、勝也。こゝを以て、身足は、懸に、太刀は待也。身足を懸にするは敵に先をさせむ為也。

○一 心と身とに懸待ある事

心をは、待に、身をは懸にすべし。なぜになれば、心か懸なれば、はしり過ぎて、悪程に、心をは、ひかへて、待に持て、身を懸にして、敵に先をさせて勝べき也。心が懸なれば、人をまづきらんとして、負をとる也。又の儀には、心を懸に、身を待にとも心得る也。なぜになれば、心は無二油断一はたらかして、心を懸にして、太刀をは、待にして、人に先をさすの心也。身と云は即、太刀を手持と心得ればすむ也。然は、心は懸に、身は待と云也。両意なれども極る所は、同心也。とかく敵に、先をさせて、勝也。

○一 敵懸之時、我立相習之事

一 二星 一 嶺谷

一 組物之時遠山之事

右此三ヶ条は、目着也。子細は可口傳。

○一 遠近の拍子

一 身ノ位柵檀之手持之事

右二ヶ条は太刀の上と身かまへなり。

○一 拳を楯にする事

一 身をひとへになす事

○一 敵の拳を、我肩にくらぶる事

○一 あとの足をひらく心持の事

○一 かまへはいつれも相がまへの事

右以上五ヶ条は、身にあり太刀にあり、一々立相て、な

らふへし。筆にはあらはしがたし。さて心持は、五ヶ条ともに、敵と立あはぬ先に、下作に、おもひつめて、念を入、心に無二油断一して、立あふてから、ふためかぬ様に、心がくる事簡要也。心に下作なくして、ふと立あふては、習の手も何も出ぬ事也。

○一 敵待之時立あふ習の事

一 二星 一 嶺谷 一 遠山

右三ヶ条は、待にとりしめたる敵には、此三ヶ条の目付をはづすへからず。但此目付は、懸待共に用る也。此目付簡要也。うちこむ時は、嶺の目付切合せ、組物との時は、遠山の目付を、心によくかくへし。二星は、不断はなれざる目付也。

○一 三ヶ心持之事

三ヶは即三見也。つけ、かけ、習、のか、り様、以上三也。

敵の何とはたらくべきとも、難計時、此三ヶを以て、さはつて可見也。敵の心をさぐり見る也。待にかたまりたる敵をは、三見、三ヶ、色をつけ、表裏をしかけて、敵に、手をださせて勝べき用也。

○一 就色随色

右の心は、待なる敵に、こちらから、様々に、色をしかけて、見れば又、敵の色か、あらはる、也。その色にしたかひて勝也。

○一 二目遣の事

待なる敵に、様々、表裏をしかけて、敵のはたらきを見るに、みる様にして見す、見ぬやうにして見て、間々に、油断なく、一所に目を、かす、目をうつして、ちやくとみる也。或詩に

いはく、チウガンニメセイテイイサク 倷眼、トシバウ 蜻蜓避、ハクローラ 伯勞と云句あり。チウガン 倷眼とは、ぬす見、ハクローラ 伯勞にとられじとて、伯勞の方をぬすみ見に見て、飛はたらく也。伯勞とは、モス 鴟の事也。敵のはたらきを、ちやくくくとぬすみ見に見て、無_二油断_一はたらくへき也。サルカク 猿樂の能に、二目つかひと云事あり。見て、やかて目をわきへうつす也。見とめぬ也。

○一 打にうたれよ、うたれて勝心持之事

人を一刀ヒトカタナきる事は、やすし。人にきられぬ事は、成かたき物也。人はきるとおもふて、うちつけうともまよ、身にあたらぬ、つもりを、とくと合点ガッテンして、おどろかす、敵にうたる、也。敵はあたるともおもふて、うてとも、つもりあれば、あたらぬ也。あたらぬ太刀は、死太刀也。そこを、こちから、越コシて、うつて勝也。敵のする先は、はつれて、われ返而、先の太刀を敵へ入也。一太刀打てからは、はや手はあげさせぬ也。打てより、まうかうよと、おもふたらは、二の太刀は、又敵に必うたるへし。爰にて、油断して負也。うつた所に、心がとまる故、敵にうたれ、先の太刀を、無にするなり。うつたる所は、きれうと、きれまひとま、心をと、むるな。二重三重、猶四重五重も、打へき也。敵にかほをもあげさせぬ也。勝事は、一太刀にて定る也。

○一 三拍子之事

相打一 上ればつけて打一 さくればこして打一也。

あふ拍子ヒヤウシはあし、。あはぬ拍子をよしとす。拍子にあへは、敵の太刀、つかひよく成也。拍子かちかへは、敵の太刀つかはれぬ

也。敵の太刀の、つかひにくき様に、打へし。つくるも、こすも、無拍子フヒヤウシにうつべし。惣別ソウベツのる拍子はあしき也。

○一 大拍子小拍子、小拍子大拍子之事

敵が大拍子にかまへて、太刀をつかは、我は、小拍子につかふへし。敵小拍子ならば、我は大拍子につかふへし。これも、敵と拍子を、あわせぬ様につかふ心得なり。拍子かれば、敵の太刀が、つかひよく成也。たとへは、上手のうたひは、のらずして、あひをゆくほとに、下手鼓は、うちかぬる也。上手のうたひに、下手鼓。上手の鼓に、へたうたひの様に、うたひにく、打にくき様に敵へ、しかくるを大拍子小拍子、小拍子大拍子と云也。下手のうたひは、大拍子にながし、上手の鼓ツ、ミが小拍子にかるくうたんとすれとも、うたれざる也。又上手のうたひが、かるくうたへは下手鼓が、をくれて、得うたざる也。上手の鳥さしは、さほを鳥に見せて、むかふから竿サツをぶらくと、ゆぶりもつてづるくとよつて、さす也。鳥が竿のぶらとる拍子に、とられて、羽ハをふるひくと、たんととして、得た、すして、さる、なり。敵と、拍子ちがふ様にすべき也。拍子がちがへは、みぞもとばれずしてふみこむ者也。か様の心持まで、吟味ギンミすべき也。

○一 章哥シヤウガの心付の事

まひもうたひも、しやうがしらずしては、はやされまひ事也。兵法にも、章哥シヤウガの心もちあるへき事也。敵の太刀のはたらき、如何様にあるぞ、何としたるさはきそと、とくと見すへて、そこをしるが、舞、うたひの章哥よく覚えたる心なるへし。敵のはたら

き振舞フルマヒよくしりたらは、こちのしかけ自由ジユウなるへし。

● 太刀つれの事

- 一 敵身方両三寸之事
- 一 身之早速サツソクぬすみこむ事
- 一 上段にからみの目付之事
- 一 車の太刀左右ともに、わけめ目付之事
- 一 三尺つもりの事

右六ヶ条は、師匠シシヤウと、立相ナラヒケて、習口傳ナラヒケせずは、なるまじき条々也。筆にはことくくにあらはさす。如レ此の条々を以て、色々に、序シヨを切懸キリカケ表裏をすれとも、おどろかずして、敵先センをこさすして、待にとりかため居時イルは、三尺をぬすみこみて、敵の身へちかくよる時に、敵こちらへかねて、懸ケンに向時ムカフ、敵にせんをさせ、うたれて、敵をうつなり。とかく、敵うたねは、かつ事はならぬ也。敵か我をうつても、我には、あたらぬつもりを、よくおほえねは、卒尔ソツジに、又うたる、こともならぬ事なり。其段を、能けいこしすまして、おそろしげもなく、敵の身へ、ちかつきて、うたせて、却而勝なり。先々の心持也。

- 一 大曲之事 付 序シヨの切かけの事 口傳すべし。
- 一 残心之事 懸待ともに用 口傳すべし。
- 一 小太刀一尺五寸のはつしの事
- 一 かゝり候時懸待ある事 身を懸に、太刀は待に心得へし。

右いづれも、師匠と立あひて、習口傳せすは、難ナ成条々也。筆にはよくのべかたし。

○ 一 風水の音をきく事

とも、角にも、此道は表裏を本として、様々に序シヨを切かけ、色をしかけて、敵に、先手をさせて勝分別ばかり也。立あはぬさきは、敵は懸也と覚悟して、油断すべからず。下作専要也。敵懸也ともおもはずして、立相ナラヒケといなや、ほかと急々キウクにきびしく仕かけられてからは、わが平生ヘイセイの習も、何の手も出ざる者也。立あふてからは、心身足をは、懸に手をは、待にする事簡要也。有ウをよく心にかけて、見るべし。有ウを手にとれと云ならひ是也。如何にも、しづかに見すは、太刀の習も、用に立まじき也。風水の音をきくと云事、上ウエは静シツカに下は氣、懸ケンに持モツ也。風フウにこゑはなき物也。物にあたりてこゑを出す也。されば、上ウエを吹フクは、しつか也。下に、木竹よろつの物にさはりて、その声さはかしく、いそかはしき也。水も上より落るには、声なし。物にさはり、下へおちつきて、下にていそかはしく声がする也。是をたとへに引て、上は静に、下は氣懸に持と云也。うわつらには、如何にも、しとりて、ふためかずして、静シツカに内には、氣を懸ケンに無ニ油断ユウダンもつたとへ也。身手足いそかはしきは、あし、懸待ケンタイを内外ウチソトに、かけてすへし。一方に、かたまりたるはあし、陰陽インヤウたがひにかはる心持シンチを思惟シユイすべし。動くは陽也。静なるは陰也。陰と陽とは、内外にかはりて、内に陽うごけは、外ホカは陰シツカ也。内陰なれば、うごひて外にあらはる。如レ此兵法にも、内心に氣をはたらかし、うごかし、無油断ニして外は又ふためかず、静にする。是陽内にうごき陰外に静なる天理テンリにかなふ也。又外きびしく懸なれば、内心を外にとら

れぬやうに、内を静にして、外懸なれば、外みたれさる也。内外ともに、うこけは、みたる、也。懸待、動静、内外をたかひにすへし。水鳥の水にうかひて、上はしつかなれとも、そこには水かきをつかふことくに、内心に油断なくして、此けいこ、つもりぬれば、内心外ともに、うちとけて、内外一つに成て、少もさはりなし。此位に至る、是至々極々也。

○一 病氣之事

かたんと一筋におもふも病也。兵法つかはむと一筋におもふも病也。習のたけを出さんと一筋におもふも病、かゝらんと一筋におもふも病也。またんとはかりおもふも病なり。病をさらんと一筋におもひかたまりたるも病也。何事も、心の一すちにと、まりたるを、病とする也。此様々の病皆心にあるなれば、此等の、病をさつて心を調る事也。

○一 病をさるに、初重後重の心持ある事

病をさる初重

ワタツテネンニムネンワタツテヂヤクニムヂヤク
涉レ念無念涉レ着無着此心は、病をさらんとおもふは念也。心にある病をさらんとおもふは涉レ念也。又病と云も、一筋におもひつめたる念也。病をさらんとおもふも、念也。しかれば念を以て、念をさるなり。念をされは、無念なり。爰を以て、涉レ念ニ無念と云也。念に残りたる病を、念を以てされは、後は、さる念も、さらる、念も、共になくなる也。以テ概拔概と云は、此事也。ぬけぬ概を、又同概を打ちめば、くつろきて、概がぬくる也。ぬけぬ概か、ぬくれは、後に打ちみたる概も、あとには不

残也。病氣がされは、病氣をさる念も、あとには残らぬ程に、涉レ念ニ無念と云也。病氣をさらんとおもふは、病氣に着した物なれとも、以テ其着一病をされは、着も不残ほどに、涉レ着無着とは云也。

後重

後重には、一向に、病をさらんとおもふ心のなきが、病をさる也。さらんとおもふが病氣也。病氣にまかせて、病氣のうちに交て居が、病氣をさつたる也。病氣をさらんとおもふは、病のさらすして、心にある故なり。しからは、一圓病氣がさらすして、する程の事、おもふ程の事か、着してする事に、勝利あるへからす。いかに可心得そや。こたへて云初重後重と、二たてたるは、此用也。初重の心持を修行して、修行積ぬれば、着をさらんとおもはすして、ひとり着かはなる、也。病氣と云は、着也。佛法にふかく着をきらふ也。着をはたれたる僧は、俗塵にまじりてもそまず、何事をなすも、自由にして、と、まる所がなひ者也。諸道の達者、其わざくの上に、付て、着がはなれすは、名人とはいはるまじき也。みが、ざる玖は塵ほこりがつく也。みかきぬきたる玉は、泥中に入ても、けかれぬ也。修行をもつて、心を玉をみかきて、けかれにそまぬやうにして、病にまかせて、心をすてきつて、行度様に、やるべき也。

○僧問古徳一如何是道。古徳答曰、平常心是道。

右の話、諸道に通じたる道理也。道とは、何たる事を云ぞとへは、常の心を道と云也と、こたへられたり。実に至極の事也。

心の病皆さつて、常の心に成て、病と交りて、病なき位也。世法の上に、引合て、いは、弓射る時に、弓射とおもふ心あらば、弓前みたれて不_レ可_レ定_サ太刀つかふ時、太刀つかふ心あらば、太刀前定るへからず。物を書時、物かく心あらば筆定るへらす。琴を引とも琴をひく心あらば、曲乱_レへし。弓射る人は、弓射る心をわすれて、何事もせざる時の常の心にて、弓を射ば、弓定るへし。太刀つかふも、馬にのるも、太刀つかはす、馬のらす、物か、す、琴ひかす、一切やめて、何もなす事なき、常心にて、よろづをする時、よろづの事難なくするくと、ゆく也。道とて何にても、一筋、是ぞとて、胸にかば、道にあらず。胸に、なに事もなき、人が、道者也。胸には、何事もなくして、又何事成共なせは、やすくと成也。鏡の常にすんで、何のかたちもなき故に、むかふ物のかたち、何にてもうつりて、明なるがごとし。道者の胸の内は、鏡のごとくにして、何もなくして、明なる故に、無心にして、一切の事一もかく事なし。是只、平常心也。此平常心をもつて、一切の事をなす人、是を名人と云なり。よろづをなすに、なす心をたゞしく持て、なす心を、外へちらさずして、一すちに、其事をなすに、しどろもどろにして、一度はなす事よく、よきかとおもへば、又一度は即、あしく、或兩度よく、又一度あしく、よき事兩度に成て、あしき事、一度に成たりと、悦ぬれば、又あしき事兩度に成、一切不_レ定_レ是_レその、よくせんとおもふ心にて、する故也。いつとなく功つもり、稽古かさなれば、はや、よくせんとおもふ事、そとのきて、何事をなすとも、おも

はずして、無心無念に成て、木でつくりたる、道幸の坊が曲することくに成たる位なり。此時我もしらす心になす事なくして、手足がする時、十度は十度なから、はずれず。其間にも、いさ、かも、心にかゝりたれば、はづる、也。無心なる時、皆あたるなり。無心とて、一切心なきにあらず。唯平常心なり。

○木人如_シ對_ニ花鳥_一。是、龐居士がこ葉也。木で作たる人の、花鳥にむかひ居たるがごとくと也。目は花鳥にあれとも、心花鳥にうごかざる也。木人は心なければうごかざる。尤道理あり。心ある人として、木人のことくらん事、いかにして成へきそや。木人とは、たとへなり心ある人として、木とひとしくはあるべからず。人として竹木のことくにはあるべからず。花を見ると、花見る心をあらたに生じてみざる也。たゞ常の心にて無心にみるをいへり。弓射る時、弓射る心をあらたに生じて射ざる也。常の心にて射るをいへり。常の心を無心とは云なり。常の心をかへて新たに生れば、形もあらたまる程に、内外ともにつごく也。動転する心にてよろづをなさは、なに事も不_レ可_レ然也。一言いへども動転せぬ云様かなとこそ、人をば褒美する物なれ。諸佛の不動心といへる事実に殊勝に覚ゆ。

右の両条は兵法の病氣をさると云心持にあて用る事也。

○中峯和尚云、具_ニ放心_一。

右の語に付て、初重後重あり。心を放かけてやれば、行さきにとまらる程に、心をと、めぬ様に、あとへちやくとしかへしかへせと、教ゆるは、初重の修行也。一太刀うつて、うつた所

に心のと、まるを、わか身へ、もとめかへせと教る也。

後重には、心を放かけて、行度所へやれと也。はなしかけてやりても、とまらぬ心になして、心を放すなり。具ニ放心心一、心ヲ放ス、ろをもて。心を、綱を付て、常に引て居ては、不自由なぞ。放しかけてやりても、とまらぬ心を、放心々と云。此放心々を具すれば自由がはたらかる、也。綱をとらへて居ては、不自由也。犬猫もはなしかひこそよけれ。つなぎ猫つなぎ犬は、かはれぬ物也。儒書をよむ人、敬の字にと、まりて、是を向上とおもふて、一生を、敬の字にて、すます程に、心をつなぎ猫の様にする也。佛法にも、敬の字なきにあらず。経に一心不乱と説給ふ。是即敬の字にあたるへし。心を一事にをきて、余方へ乱さざる也。勿論敬白夫佛者と唱る所あり。敬礼とて佛像にむかひ、一心敬禮と云。皆敬の字の意趣たがはず。然共是は、一切に付て、心のみたる、を、治るの方便也。よく治りたる心は治むる方便を不用也。口に大聖不動と唱へ身をたゞしくして、合掌して、意に不動のすがたを觀ず。此時、身口意の三業平等にして、一心みたれず。是を三密平等と云。即敬の字の意趣に同じ。敬者即本心の徳にかなふ也。然共、行ふ間の心なり。合掌をばなち、佛名をとなへやみぬれば、心の佛像ものきぬ。更又もとの散乱の心也。始終治りたる心にはあらず。心をよく一度おさめ得たる人は、身口意の三業を淨めず塵にまじはりて、けがれず。終日うこけとも、うごかず。千波万波したがひうこけども、その月のうごく事なきがごとく也。是佛法の至極せる人の境界也。法

の師の示をうけて、爰に記者也。

兵法家傳書上卷終

柳生但馬守

花押

寛永十四年丁丑五月吉日

細川越中守殿

参

四 小城鍋島家本との比較

1. 構成

『兵法家伝書』上卷は「殺人刀」と呼ばれる⁽⁸⁾。この「殺人刀」の卷は、一八の項目から構成されている⁽⁹⁾。

- ①序論（兵を用いるも天道也） ②大学とは初学の門也 ③氣と志の事 ④表裏の事（表裏は兵法の根本也、草を打ちて蛇を驚かすと禪に云ふ事） ⑤機前 ⑥懸待二字子細の事（懸待、身と太刀とに懸待の道理ある事、心と身とに懸待ある事、敵懸の時の習、敵待の時の習） ⑦三ヶ心持の事 ⑧色に就き色に随ふ ⑨二目遣の事 ⑩打にうたれよ、うたれて勝つ心持の事 ⑪拍子の事（三拍子の事、大拍子小拍子大拍子の事、章歌の心付の事） ⑫師匠と立相ひての習一（太刀づれの事、敵身方面三寸の事、身の早速ぬすみこむ事、上段にからみの

目付の事、車の太刀左右ともにわけめの目付の事、三尺つもりの事）
 ⑬ 師匠と立相ひての習二（大曲の事、残心の事、小太刀一尺五寸のはづしの事、かゝり候時懸待ある事）
 ⑭ 風水の音をきく事
 ⑮ 病気の事（病をさるに初重・後重の心持ある事）
 ⑯ 平常心の事（僧古徳に問ふ）
 ⑰ 無心の事（木人花鳥に対するが如し）
 ⑱ 放心心を具せよ（中峯和尚云く、放心心を具せよ）

2. 本文

制作年月からすると、今回活字化した細川家本が先に完成し、後に小城鍋島家本が整えられたことになる。しかし、小城鍋島家本が細川家本を基にした、ないしは他に原本があり（例えば江戸柳生家本のような）それを手本に書写したとは判断できない。その理由として、

- ア. 平仮名の元となる漢字が一定していない。
- イ. 漢字と平仮名が不統一である。
- ウ. 改行すべきところがされていない。

ア. においては、例えば構成①「序論」において「人をころすとして、人にころさるゝならし」という箇所があるが、ここの「ころさるゝ」は、小城鍋島家本では「ころさ流ゝ」とあるが、細川家本では「ころさ類ゝ」となっている。また、構成⑪「拍子の事」では、小城鍋島家本には「上手のうたひは、のらずして、あひをゆく程に」とあるのが細川家本では「あひをゆく本とに」とある。以下、

す（寸）↓須、し（之）↓志、つ（川）↓津、る（留）↓類といったケースも見られた。

イ. における典型的なケースは「もの」↓者、「みる」↓見る、である。この二つは広範において見られる。この他には「あしき」↓「悪」、「これ」↓「是」、「われ」↓「我」なども見られた。

ウ. のケースは、構成⑱「放心心を具せよ」に見られる。ここは、中峯和尚が言う「具放心心」には二通りの教え、即ち初重と後重があることが述べられている箇所である。小城鍋島家本では、初重の説明が終わると改行し、新たな項であることを意味する「○」印をつけて「後重には」と続くが、細川家本では改行せずにそのまま綴られている。因みに江戸柳生家本では、細川家本同様に改行されずにあることがわかる。¹¹⁾

3. 朱書き

朱書きにおいても両書の特徴が窺える。それをまとめると、

- ア. 振り仮名の施し方
- イ. 句読点の打ち方
- ウ. 特徴的な読み方となる。

ア. については、小城鍋島家本では必要最低限のものに付されている感があるが、細川家本ではかなり細かく振られている印象を持つ。例えば、構成②「大学とは初学の門也」では、「大学は初学の門也と云事。凡家に至るには、まづ門より入者也。」と、小城鍋島家本

では一切、朱が入れられていないのに対して、細川家本では「大学ガクは初学シヨガクの門也と云事ヲヨソイハ。凡家イタルに至るにはまづ門より入もの也。」となっている。

イ. についてであるが、両書は同じように句読点が打たれたとは言い難い。もちろん、原文の意を曲げるようなうち方はされていないが、例えば、構成①「序論（兵を用いるも天道也）」の「法をしらざれば、人をころすとして、人にころさるゝならし熟ツラク思兵法オモフといは、人と、我と、立あふて、刀二にて、つかふ兵法ママ、は負も一人、勝も一人のみ也。」（細川家本）に対して、小城鍋島家本では「法をしらざれば、人をころすとして、人にころさるゝならし熟ツラク思兵法オモフといは、人と、我と、立あふて、刀二にてつかふ兵法は、負も一人、勝も一人のみ也。」とある。また構成⑭「風水の音をさく事」にある「水鳥の水にうかひて、上はしつかなれとも、そこには水かきをつかふことくに、内心に油断なくして、此けいこ、つもりぬれば、内心外ともに、うちとけて、内外一つに成て、少もさはりなし。」（細川家本）は、小城鍋島家本では「水鳥の水にうかびて、上はしづかなれども、そこには、水かきをつかふことくに、内心に、油断なくして、此けいこつもりぬれば、内心外ともに、うちとけて、内外一つに成て、少もさはりなし。」となる。書写しているというよりは、原文を読んでいるといった感がある。

ウ. については、朱を入れた者の個性が如実に表れた箇所と言えるかもしれない。

構成④「表裏の事（表裏は兵法の根本也、草を打ちて蛇を驚かす

と禅に云ふ事）」では、「真実シンジツに内にかくして、外ホカにはかりことをなすも」と、「外」を「ホカ」とルビを振っている（小城鍋島家本ではルビなし）。同様のケースに、構成⑭「風水の音をさく事」の「内に陽うごけは、外ホカは陰シツカて静也。」（小城鍋島家本ルビなし）がある。

構成⑪「拍子の事（三拍子の事、大拍子小拍子大拍子の事、章歌の心付の事）」では、「上手の鳥さしは、さほを鳥に見せて、むかふから竿をぶら〜と、ゆぶりもつてづる。〜とよつて」（小城鍋島家本、点筆者）とあるが、細川家本では「上手の鳥さしは、さほを鳥に見せて、むかふから竿ササをぶら〜と、ゆぶりもつてづる。〜とよつて」（点筆者）と読ませている。

構成⑱「放心心を具せよ（中峯和尚云く、放心心を具せよ）」では、「右の語ゴに付て、初重シヨヂウ後重コウヂウあり。」（細川家本）と「後重」を「コウヂウ」と読ませている。前段の構成⑮「病氣の事（病をさるに初重・後重の心持ある事）」のタイトルにおいても、細川家本では「後重ヂウ」とルビを振っている。ただし、「後重」に統一されているわけではなく、同⑮の後段には「いかなか可心得イハクシヨシウそやこたへて云初重コウヂウ後重」と、二たてたるは」と、「コシウ」とあることがわかる。

同じく構成⑱には「心を一事イチジにをきて、余方イハクシヨシウへ乱さる也。」（小城鍋島家本）とある。この「余方」は「余所」の意と思われるが、小城鍋島家本、江戸柳生家本⑫ではルビが振られていない。しかし、細川家本では「ヨカタ」と振られている。

結語

本稿では、原本の複写物を参照したため、活字化の過程に生じる可能性のある誤植問題は排除されている。これを踏まえて再度、両書を読み込むと、二書に見られる差異が物語るものは、共通するオリジナルの書を基に書写されたものではないということである。では、この二書の原本はどこにあるのか。

渡辺一郎氏は校注『兵法家伝書』（岩波文庫）の中で、江戸柳生家に鹿島鍋島家本、細川家本の原本とみられるものがあることを示唆している¹³。これが事実であるとすれば、少なくとも細川家の原本は江戸柳生家にあるそれを基に作成されたということになるが、小城鍋島家本の出展は不明である。

僅かな差異を枝葉末節として切り捨ててしまつてよいものなのかどうか、これは次に筆者が行わなければならない、細川家本下巻「活人剣」の活字化を待つて考究することとする。岩波書店刊行思想体系六一『近世芸道論』に所収されている渡辺一郎氏校注の『兵法家伝書』は江戸柳生家本を基に翻刻されたものがある。同書との比較も何れ近いうちに行う必要があると考えている。

【注】

(1) 渡辺一郎氏によれば、現在確認されている伝本は、(一)江戸柳生家本、(二)小城鍋島家本、(三)鹿島鍋島家本、(四)細川家本の四つであり、(一)と(三)は寛永九年、(二)は天保三年、(四)は寛永一四年である。(渡辺一郎校注『兵法家伝書』岩波文庫、一九九九年)

(2) 『兵法家伝書』に関する研究に関しては、拙著『柳生新陰流の研究』（文理、二〇〇三年）一七―一九頁に先行研究として載せてある。

(3) 『鈴鹿家文書』は大日本武徳会武道専門学校が剣術を中心として関係資料を収集したものである。

(4) 拙著『兵法家伝書に学ぶ』日本武道館、二〇〇四年。

(5) 今村嘉雄『柳生遺聞』エルム、一九七四年、二〇六頁。

(6) 渡辺一郎校注『兵法家伝書』岩波文庫、一九九九年、一七九―一八〇頁。内容は以下の通り。

兵法要具三種心

第一 具大信心

第二 具放心心

第三 具不退転心

具大信心則無所疑

具放心之心則自々由也

具不退転心則兵法在茲

離太刀習消、始至兵法

柳生但馬様

細 越中

(7) 前掲書(5)、二〇八頁参照。ここでは今村嘉雄氏の説を取り上げたが、渡辺一郎氏も同様の論考を認めている(前掲書(6)、一六一―一八四頁)。

(8) 『兵法家伝書』下巻の末尾に「此卷上下を殺人刀活人剣と名付たる心は」とある。

(9) 前掲書(4)、二二頁参照。

(10) 前掲書(4)、資料編二二頁。

(11) 渡辺一郎校注『兵法家伝書』日本思想体系六一『近世芸道論』岩波書店、一九七二年所収、三三二頁。

(12) 同右、三三二頁。

(13) 前掲書(6)、一六四頁。